

2015年冬に島根半島へ漂着したオサガメの記録

河野重範*・高橋亮雄**・渡辺克典***

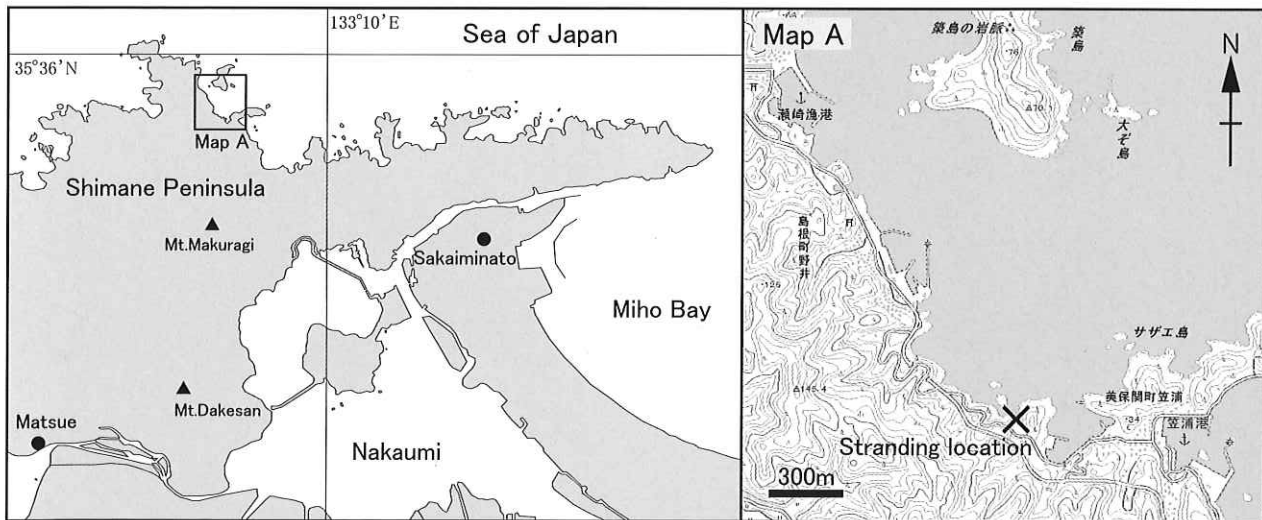
Stranding of a leatherback turtle, *Dermochelys coriacea* (Testudines: Dermochelyidae) on a coast of Shimane Peninsula, western Japan, in winter 2015

Shigenori Kawano, Akio Takahashi and Katsunori Watanabe

1. はじめに

島根県沖を北上する対馬海流の影響下にある島根半島の沿岸では、しばしば珍しい海生生物が確認される。例えば、これまでに無脊椎動物ではカブトガニやアオイガイ、タコブネなど、脊椎動物ではチョウザメやセグロウミヘビ、アカウミガメ、アザラシ、ニホンアシカ、トドなどが報告されている(上田, 1962; Okutani and Kawaguchi, 1983; 櫻井・河野, 2010; 河野ほか, 2013)。これらの多くは暖流系種であるが、稀にアザラシやトドといった寒流系種も含まれる。

このほか島根半島では多くが未報告ではあるものの、毎年のように夏季に大敷網(定置網)にウミガメが入網したり、冬季に海岸へ死骸が漂着したりするが、そのほとんどはアカウミガメやアオウミガメである(河野, 未公表)。また、この一帯でのウミガメと漁民とのつながりは古く、大敷網にウミガメが入ると縁起が良いとされ、酒を飲ませて海へ戻す習俗も残されている(藤井, 2011)。このような背景のもと、島根半島における確認例がほとんどないオサガメ(カメ目オサガメ科)の漂着個体を松江市美保関町の海岸で観察する機会を得たのでここに報告する。

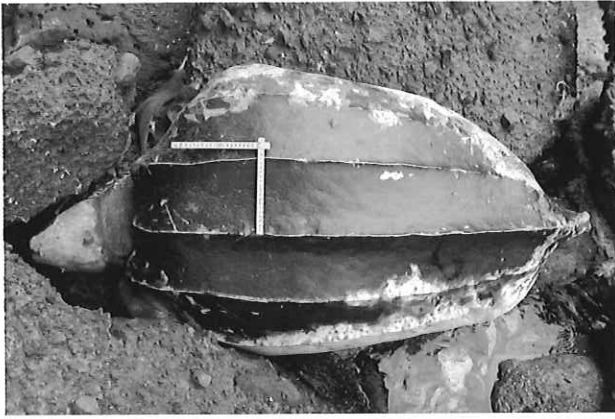


第1図 オサガメの漂着地点。国土地理院2万5千分の1地形図「瀬崎」, 「加賀」, 「境港」を使用。

* 栃木県立博物館, 〒320-0865 栃木県宇都宮市睦町 2-2
Tochigi Prefectural Museum, Mutsumi-cho 2-2, Utsunomiya, Tochigi, 320-0865, Japan
E-mail: spinileberis@gmail.com

** 岡山理科大学理学部動物学科, 〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町 1-1
Department of Zoology, Okayama University of Science, Ridai-cho 1-1, Kita-ku, Okayama, 700-0005, Japan

*** きしわだ自然資料館, 〒596-0072 大阪府岸和田市堺町 6-5
Natural History Museum, Kishiwada City, Sakai-machi 6-5, Kishiwada, Osaka, 596-0072, Japan



第2図 漂着個体.



第3図 吻部の状況.



第4図 右前肢の付け根.



第5図 右後肢周辺の状況.



第6図 右前肢の先端.



第7図 甲羅の内部の様子.

2. 記 録

漂着個体は、2015年2月7日に鳥根県松江市美保関町笠浦(35° 34' 39.75"N, 133° 7' 24.09"E; 第1図)の海岸で小川優作氏によって発見された。ウミガメの背甲には鱗板が見られない一方、前後方向に明瞭な数条のキールが認められ、普段漁を行う松江市島根町多古周辺海域で目にするもののあるアカウミガメやアオウミガメとは明らかに甲羅の形態が異なることから、小川氏はすぐにこれがオサガメであることを直感し、櫻

井 剛氏を通じて河野へこの情報を提供した。翌日、河野は現地にてこれを確認し、翌々日に高橋、渡辺とともに漂着個体の観察を行った。

漂着地点付近は中新統高浜山層に由来する火砕岩の巨礫が分布し、小湾処をつくる磯浜である。漂着個体はこうした巨礫の間に挟まっていた(第2図)。背甲には明瞭な7条のキールが認められ、直甲長(SCL)130cm、甲幅(CW)82cmに達する大型の甲羅を持ち、背甲の隆条が著しく、発達した雄性生殖器が確認できるなどの特徴より、オサガメの雄の成体であると判断

第1表 島根県および鳥取県におけるオサガメの記録.

時期	場所	文献	備考
1959.12.16	島根県益田市小浜	上田(1962), 西村(1964)	
1960.11.9	鳥取県湯梨浜町泊	上田(1962), 西村(1964)	清末(1987)の1961.11.9の個体は本個体の誤り
1967.1.31	鳥取県鳥取市小沢見	-	鳥取県立博物館にて剥製を所蔵
1974.2.12	鳥取県鳥取市浜坂	清末(1987)	
1981.1.30	鳥取県岩美町浦富	清末(1987)	
1984 ~ 2003	島根県内	島根県水産試験場編(2003)	2頭の死亡個体
2007.11.7	島根県江津市嘉久志町	(財)しまね海洋館編(2009)	
2015.2.7	島根県松江市美保関町笠浦	本報告	

された。体表面に藻類やフジツボなどの付着生物は認められなかった。背甲の外周および頭部の黒色の表皮は剥がれ落ち、骨が露出していた。頭部では頭骨の白骨化が進行し、上顎吻部（前上顎骨）は脱落していたが（第3図）、付近にその脱落部位は見当たらなかった。前肢は左右ともに残っていたが、右前肢は肩甲骨と上腕骨の関節が外れて脱落途中であり、皮膚のみでつながっている状態であった（第4図）。なお、右前肢の上腕骨頭には何かに齧られたような円形の窪みが認められた。後肢は左後肢のみ残存しており、右後肢は大腿骨から先が脱落していた（第5図）。残存している各ヒレの指骨はいずれも腐敗により先端付近の指骨が欠損しており（第6図）、ヒレの周囲には全ての本数は揃わないものの、脱落した数本の指骨が落ちていた。甲羅の内部は、右前肢の付け根付近から観察することができたが、内臓等は食道や胃の一部を除いて、大部分が腐敗によって既に失われており、空洞化が進行していた（第7図）。

3. おわりに

漂着個体は上顎吻部や右後肢、各ヒレの先端が漂着前に脱落しており、右前肢の上腕骨頭に齧られたような窪みがあったことから、死亡後に相当の期間腐敗しながら漂流していたと考えられる。上腕骨頭を齧った動物は不明であるが、島根半島に生息する動物相をみると漂着後に齧られたとは考えにくく、漂流中にサメに咬まれた可能性が考えられる。甲羅内部には筋肉や内臓等がほとんど残されていなかったことから、これらも漂流中に甲羅の外へと失われたと思われる。また、指骨のいくつかはヒレの周辺に落ちており、漂着後も腐敗が進行し脱落したものと判断される。これらのことから、漂着個体は山陰地方では厳冬期にあたる時期に発見されたものの、その死亡時期は概ね晩秋から初冬あたりと推定される。

近年の島根県におけるウミガメ類をはじめとした海生希少動物の記録の多くは、しまね海洋館アクアスの定期刊行物に掲載されているが、毎年のように確認されるアカウミガメやアオウミガメに比べてオサガメの記録はほとんど見られない。そこで、筆者らが調べることのできた過去のオサガメの確認例を鳥取県の情報も加えて第1表に示すが、それでも10頭未満であり極めて記録が少ない。これはオサガメの個体数の少なさが要因のひとつとして影響していると思われる。

人目に触れることなく漂流、漂着する海洋生物も多いと思われるが、近年の山陰地方ではしまね海洋館アクアスや鳥取県立博物館の継続的な調査により、着実に海生爬虫類や海生哺乳類の情報が蓄積されてきている状況である。このように、多数の分類群からなる海洋生物の基礎情報の蓄積は重要であり、今後の日本海域における海洋生態系の保全等施策に活用されていくことを期待したい。

謝 辞

本報告を行うにあたり、松江市島根町多古の小川優作氏と同市学園の櫻井 剛氏には漂着の情報をいただいた。島根県水産技術センターの寺門弘悦氏、鳥取県立博物館の徳田悠希氏、一澤 圭氏、島根県立三瓶自然館の星野由美子氏には文献および情報をご教示いただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 藤井弘章（2011）隠岐・山陰沿岸のウミガメの民俗。民俗文化、23, 173-218。
 上田常一（1962）山陰地方の海岸に不時回遊し、または漂着した珍しい動物。山陰文化研究紀要、2, 1-35。
 河野重範・服部 薫・櫻井 剛・大塚健斗（2013）日本海南部の

島根県島根半島で2007年夏に確認されたトド。島根県立三瓶自然館研究報告, 11, 31-38.

清末忠人 (1987) 鳥取沿岸の漂着動物について (1). 鳥取生物, 21, 15-20.

西村三郎 (1964) 日本近海におけるオサガメの記録. 生理生態, 12, 286-290.

Okutani, T. and Kawaguchi, T. (1983) A mass occurrence of *Argonauta argo* (Cephalopoda: Octopoda) along the coast of

Shimane Prefecture, Western Japan Sea. *Venus*, 41, 281-290.

櫻井 剛・河野重範 (2010) 2009年夏に島根半島沖の定置網で混獲されたアオイガイとタコブネ. 島根県立三瓶自然館研究報告, 8, 41-46.

島根県水産試験場編 (2003) 島根のさかな. 山陰中央新報社, 216p.

財団法人しまね海洋館編 (2009) しまね海洋館アクアス平成19年度年報. 財団法人しまね海洋館, 44p.